

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL.01089)

「新しい文明」の萌芽を探る
—日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる—

(思想・文学分野)

保田與重郎
「絶対平和論」への軌跡

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2022年1月21日開催の第89回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る

— 日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどる —

保田與重郎「絶対平和論」への軌跡

保田與重郎の戦後における重要な仕事として「絶対平和論」（1950年）がある。そこでは、徹底的に技術を伴う近代を否定することが平和への道と説かれている。当時の論壇からは空想論として無視されたが、なぜ保田がかかる主張を展開したのかを考えるために、一つは、戦前から「文明開化の論理の終焉について」（1939年）等で展開されていた近代批判とそれに伴う「偉大な敗北」論、さらに、もう一つとして、保田が近代批判の一環としてとりわけ重視したゲーテ論（『エルテルは何故死んだか』、1939年）を軸に考えて行く予定である。とりわけゲーテの読み替え（これが正しい読解であるとは限らないが）を通して、保田におけるポスト近代を見通してみたいと思う。

前田 雅之（Masayuki MAEDA）

明星大学人文学部教授

1954年下関生まれ。早稲田大学文学研究科博士後期課程日本文学専攻単位取得中退 博士（文学）

東京女学館短期大学教授、東京家政学院大学教授を経て、2008年より明星大学人文学部日本文化学科教授。

「高校時代のある段階で、役に立たないことを学ぼうと決意して、インド哲学に進むことを考えておりましたが、残念ながら、滑り止めの早稲田大学教育学部国語国文学科に入学してしまい、二年次、前期をインド旅行などをして留年しながらも、結局、国文学に落ち着き、インドの説話（一角仙人）が日本でどのように展開したかを卒論に出して、大学院に進みました。大学院では、『今昔物語集』を中心に研究し、『今昔物語集の世界構想』（笠間書院、1999年）で博士号を取得しましたが、その後は、日本における古典や古典的公共圏の意味を考えるようになりました。保田與重郎に興味をもったのも、彼が古典復興を主張し、実践していたからです。」



目次

はじめに

- (1) 講演要旨
- (2) 構成

I 保田與重郎年譜と主要作品

- (1) 生い立ち
- (2) 文壇活動
- (3) 戦中～戦後の批判
- (4) 本格活動の再開

II 保田の近代批判、偉大な敗北（ナポレオン、日本武尊、木曾冠者）

- (1) 『コギト』創刊号「編輯後記」（保田執筆、1932年3月）
- (2) 小説「やぼん・まるち」（『コギト』創刊号所収）の末尾
- (3) 保田の朝鮮体験（1932年7月、慶州を中心に滞在）
- (4) イロニーをめぐって
- (5) 偉大な敗北の起源と系譜
- (6) 日本武尊・木曾義仲

III ゲーテと連動する後鳥羽院

- (1) 「木曾冠者」に描かれた後鳥羽院
- (2) 保田與重郎のゲーテ論
 - ① ゲーテによる近代批判
 - ② ゲーテ＝ハーフィズ、保田＝後鳥羽院
- (3) 保田與重郎の後鳥羽院論
 - ① 後鳥羽院の意義
 - ② 後鳥羽院と文芸の王国

IV 保田の戦後、絶対平和論へ

- (1) 戦後の保田と、保田への批判
- (2) 絶対平和論への道程
- (3) 「絶対平和論」の提唱
- (4) 保田與重郎と戦争

質疑応答

2022年1月21日開催

第89回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：保田與重郎「絶対平和論」への軌跡

講演者：前田 雅之（明星大学人文学部教授）

（文中敬称略）

はじめに

（1）講演要旨

本日の講演に際し、ゲーテと保田與重郎をどのように結び付けたらよいかと考えたが、まずは、なぜ保田與重郎が『絶対平和論』において「技術を伴う近代を徹底的に否定することが平和への道だ」と説いたのかということについて話したい。これは「平和を唱えて繁栄をするのは許さない」という論理である。なぜ、そういうことを言ったのかということを含めて、保田與重郎の人生、作品等を考えながら話したいと思う。

保田に関するキーワードで「文明開化の論理の終焉」という言葉がある。昭和14年に書かれて昭和15年に出された『文学の立場』という本に「文明開化の論理の終焉について」と題して書かれた文だが、彼によると明治維新からマルクス主義までが「文明開化の論理」で、その反対の日本主義も同じであり、彼らが近代＝文明開化をどのようにして超克していくかということを見ている。これについては、京都学派も昭和17年に「近代の超克」というテーマで座談会を行っているが、保田は招待されながら出席していない。そのように近代をどう捉え、どう超えていくかということと絶対平和論等が絡んでいく。



保田與重郎（1910－1981）
『保田與重郎全集』（講談社）より

それから、保田独特の「偉大な敗北」論がある。保田は大東亜戦争について「近代は戦争を作り出す」と言い、大東亜戦争断固支持であった。このアイロニーが保田である。

もう一つ、その「偉大な敗北」論と近代批判の合間に、彼はゲーテ研究をしている。『エルテルは何故死んだか』である（今は「ウェルテル」と書くが、当時は「エルテル」と書いた）。ここで彼はゲーテを近代批判者に読み替えている。それから、後鳥羽院という、戦前最も近代批判の中心となった人物を論ずるわけである。こういう流れで、戦後までを彼の作品と年譜を通じながら話していきたい。

さらに言えば、昭和の文芸批評家を二人上げるとすると、一人は小林秀雄で、もう一人がその8歳年下の保田である。保田が亡くなったとき、小林秀雄は密葬に駆け付けており、二人が理解し合っていたことが感じられる。ところが、小林秀雄は未だに批評の神様とされて

いるのに対して、保田は全く顧みられない。そこで、私はどこかで保田という人間を押さえておくことが、近代と古典等など、そういうものと絡むのではないかと考え、2017年に『保田與重郎 近代・古典・日本』という本を書いた。保田與重郎は写真を見ると分かるが、美男子である。背も高いし、文学者のなかでは全部揃った人だったといえる。

(2) 構成

このような流れで、本日の構成は4章立てになっている。1番目は「保田與重郎年譜と主要作品」で、大まかに彼の一生を見渡す。2番目は「保田の近代批判、偉大な敗北」で「偉大な敗北」がまたアイロニーである。3番目は「ゲーテと連動する後鳥羽院」、そして4番目が「保田の戦後、絶対平和論へ」という、この4章構成でお話したいと思う。

I 保田與重郎年譜と主要作品

(1) 生い立ち

保田與重郎が生まれたのは明治43年、1910年である（私は年齢を数え年で表記しているが、数え年は0がない序数の数え方であり、こちらの方が正しいのではないかと思っている）。奈良県の桜井というまち（現桜井市）に生まれたが、桜井の街なかには今も保田さんという方が住まれている。

大正12年に畝傍中学校、今の畝傍高校に入学。最近世間を賑わせている高市早苗はその後輩に当たる。

それから、昭和3年に大阪高等学校、今の大阪大学に入学する。そこでアジア主義に関わるが、中国文学者の竹内好は同期である。この年は入試に数学がなかったので、保田と竹内という素晴らしい文人二人が入学することができたと言われている。一年上には、ルネッサンス哲学思想で京大の名誉教授になった野田又夫がいた。

(2) 文壇活動

また昭和5年に、高校時代の同級で、詩人で東洋史学者の田中克己と共に『万葉集』の言葉を表題にした短歌誌『炫火(かげろい)』を創刊している。つまり、21歳ですでに短歌誌を出したわけであり、翌年、22歳で東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学して美学を専攻している。そして、昭和7年に23歳で、大阪高等学校同窓生と同人誌『コギト』を創刊した。これは「コギトエルゴスム(我思う、ゆえに我あり)」から表題を取ったものであり、昭和19年まで続いた。

このように、保田という人物は、高校の同級生の力を大いに活かしている。服部というドイツ語の達人にドイツ語の論文を訳させ、それを『コギト』に載せて、それをネタに自分が論文を書くなど、そういう意味では、保田はオルガナイザーとしてもかなりのものだったと思う。23歳で中心的存在だったのである。

それから、昭和9年、1934年に東大を卒業。卒論は「ヘルダーリン」（当時は「ヘルデルリン」と表記）である。

昭和10年、26歳で、亀井勝一郎、中谷孝雄らと一緒に『日本浪漫派』を創刊したが、この雑誌は昭和13年に終わっている。そこには、今は誰も読まないが、戦前は大詩人であった佐藤春夫、今でも大権威である萩原朔太郎、それから今も一部の人に大変人気がある伊東静雄が参加していた。伊東静雄という人は悟ったような感じだが、『文藝文化』と保田與重郎をつなぐなど、媒介者として抜群の能力を発揮していた。また、太宰治も参加しており、一大文学運動になった。

27歳のとき、『日本の橋』『英雄と詩人』を刊行し、初めて単著の著者になった。『日本の橋』は翌年に池谷信三郎賞を受賞している。そして昭和13年に結婚し、『戴冠詩人の御一人者』を刊行して北村透谷賞を受賞。つまり、彼は23歳から本格的に文壇活動、評論活動を始めて、29歳ですでに一端の評論家になったのである。8歳上の小林秀雄が『様々なる意匠』で論壇デビューしたのが27歳であるから、それに比べると異様に早い。これを押さえておいていただきたい。

その後については、私は『保田與重郎 近代・古典・日本』で保田を30歳までしか書くつもりがなかったのが30歳が彼の著作の終盤となるが、そのときに書かれたのが『後鳥羽院』と『エルテルは何故死んだか』である。この年に、先ほど紹介した「文明開化の論理の終焉について」も書いている。

（3）戦中～戦後の批判

そこから戦争に入るが、以後、保田は昭和18年、34歳までかなりの数の本を出し、昭和19年からある種の断筆に入る。『校註祝詞』や「鳥見のひかり」で「事依佐志論」などを書いたが、段々と書かなくなると同時に、「保田は右翼だ」「軍部に協力した奴だ」という一般論が増え、それは私の学生の頃までであった。

ところが、実際は、保田は憲兵の監視を受けていた。情報局にいた井上司朗という有名な役人の思い出話によると、「困った存在」とされていたのである。確かに、ただ単に当局に賛成しているのではなく、「近代が偉大な敗北をするために、大東亜戦争断固支持」というような人物は困った存在だったと思われる。

それで彼は病気になるが、昭和20年、36歳で応召され、病気のまま中国大陸に派兵されて、軍病院に入院し、そのまま敗戦を迎える。つまり、全く役に立たない兵隊だったわけだが、36歳で徴兵されたのは、ほとんど私の祖父と同じで、私の祖父は「これで日本は戦争に負ける」と思ったそうで、そういう年齢だったわけである。

昭和21年に帰国すると、保田はその後2年間ほど桜井で農業を営む。それから次第に知識人、ジャーナリズムから批判を受けるようになり、昭和23年に、誰が密告したのか分からないが、39歳で公職追放となる。そのため、以後、自分の名前を書いた文章は出せなく

なり、昭和 24 年頃から無署名の本を出すようになる。昭和 25 年に出した『絶対平和論』も無署名である。誰が書いたか分からなかったのは、署名できなかったからである。

昭和 26 年、42 歳のときに追放解除になるが、保田に対するバッシングは死ぬまで続き、保田が亡くなったときも文芸雑誌は完全無視だった。

(4) 本格活動の再開

実際に保田が本格活動を始めたのは昭和 32 年のことであり、それが保田與重郎文庫を出した「新学社」の設立である。ここは学習教材の「ポピー」を出している。

昭和 33 年、49 歳のときに保田は京都の鳴滝に新居を定め、「身余堂」と名付けた。現在、この建物は新学社が管理しており、『保田與重郎の家』という写真集が出ているが、私は保田與重郎の最後の弟子である谷崎昭男先生（故人）と一緒に、ここを訪問したことがある。今は誰も住んでいないが、素晴らしい家である。ここで彼は優雅な洛北の文人生活に入り、昭和 39 年に『現代畸人伝』を出す。これは『新潮』での連載が本になったもので、55 歳になるこの年、ようやく中央文壇に復帰する。

その後の大事な点としては、昭和 40 年に義仲寺再建に尽力した。この寺には保田の墓があるが、木曾義仲、芭蕉の大きな墓とは違い、御堂の隅にひっそりと眠っている。

昭和 43 年、『日本の美術史』『日本浪漫派の時代』を刊行する。また、彼は恐ろしいほど歌が上手だったので、それまでの歌を歌集として『木丹木母集』を刊行した。

63 歳で『日本の文学史』を刊行し、その後、向井去来の旧跡「落柿舎」の第 13 世庵主となって、「落柿舎」を盛り立てるよう働いている。これは向井去来に絡んだものではなく、保田は『芭蕉』という良い本を書くほど芭蕉が好きだったので、その関係と思われる。

そして、72 歳で亡くなっている。

このような一生だが、全集は講談社版が完全版として全 45 巻、別巻 5 巻、計 50 巻ある。そのうち敗戦の年の 35 歳までが 24 巻あるので、彼が戦前に書きまくっていたのは事実であり、戦後、黙殺されながらも、それなりに頑張って仕事をしていたことが分かる。



作品集『保田與重郎全集』（1985-1989 講談社）より

II 保田の近代批判、偉大な敗北（ナポレオン、日本武尊、木曾冠者）

(1) 『コギト』創刊号「編輯後記」（保田執筆、1932 年 3 月）

保田は、なぜか旧制高校時代から『万葉集』の論文を書いている。当時は、人の本を真似

たり、剽窃したりしながらやっていたが、なぜ彼は古典を選んだのか、それに関する事情は私が『保田與重郎 近代・古典・日本』（勉誠出版、2017年）にも詳しく書いている。

『コギト』の創刊時、彼は事実上の編集者なので「編輯後記」を書いており、そのなかで「なぜ文学を始めたのか」という生の意識を問おうとする情熱を考えることで、新たな文学運動を始めたと言っている。このなかで彼は「たい私らは『コギト』を愛する。私らは最も深く古典を愛する。私らはこの国の省みられぬ古典を愛する」と言い、突然「古典」が登場する。

ちなみに戦前、日本人は古典が好きだったというのは大嘘であり、林房雄が「大正時代の中学生」というエッセイのなかで、大正時代の中学生が勉強するのは英語と数学だけで、古典など誰も聞いてなかったと言っている。稲賀敬二（故人）も、旧制中学時代に教師が『徒然草』の「猫また」の話で生徒の関心を引こうと猫の鳴き声まで真似ても誰も聴いてなかったと言っている。戦前のことであり、現代と同じである。これに関しても私は研究しているが、それは別の話である。

そうした状況のなかで、保田は「私らは古典を殻として愛する。それから私らは殻を破る意志を愛する」と主張して、古典に基づき、古典を愛し、古典を脱するという雑誌を始めたのである。

（2）小説「やぼん・まるち」（『コギト』創刊号所収）の末尾

ところが、この創刊号に日本の古典論は何も載っていなかった。保田が訳させたドイツの評論文等が載っているだけである。ただ、そのなかで保田は「やぼん・まるち」という小説を書いている。彼は生涯に2～3編の小説を書いて止めている。これは小林秀雄と似ているが、その彼が書いたのが「やぼん・まるち」である。

タイトルの「やぼん」は「日本」、「まるち」は「マーチ」なので「日本マーチ」という意味になる。彰義隊と薩摩軍による上野戦争のときに、一人で「やぼん・まるち」を作曲し続けた男の話だが、この短い小説は非常によくできている。

するとその時どこからか唳々と小鼓の響が哀愁をいやましにかりあがらせて響いた。
宮が「風流な者がゐます」と語られたのを、隊長天野は空虚に「ハッ」と答へるだけだった。
（「やぼん・まるち」『コギト』創刊号所収、全集より）

「唳々」とは明るく澄んで鳴り響く音を表現している。「宮」とは寛永寺住職 輪王寺宮のことで、江戸時代、江戸で一番偉いのは将軍、二番目に偉いのは輪王寺宮と言われていた。輪王寺宮は12人が担ぐ輿で移動し、周りを20人の旗本が守っていて、庶民から見ると将軍の次に偉いと思う人物だったわけである。この宮が「風流なものがいます」と語られたのに対し、彰義隊の隊長は「ハッ」と言っただけだった。

あひ変わらずに喪心して鼓をうちつゞけてみた、「まるち」の作者は、自分の周囲を殺到してゆく無数の人馬の声と足音を夢心地の中で感じた。～（中略）～彼にとつて、それは薩摩側の勝ち矜つた鬨の声よりも高くたうたうと上野の山を流れてゆく様に思はれてみた。 (同上)

客観的に見ると、変な男が鼓を叩きながらおかしくなっている状況だと思うが、これをなぜ保田は書いたのか。要は、作者にとって「やぼん (=日本)」が立ち現れた瞬間は幻影=アイロニーであり、保田は「イロニイとしての日本」と言っているが、この「まるち」を「風流なものがあります」と言ったのは宮だけであって、周りは全く無視しているというところから、素晴らしい人間が無視されて相手にされない「偉大な敗北」というラインが生まれたと思われる。

これは事実上の処女作と言ってもよいが、作家は処女作にほぼすべての可能性が表れる。三島由紀夫を読んでもそうである。保田が「やぼん」を描き、結果的に「偉大な敗北」を描いたことは、彼の生涯の方向性を決定したと言えるのではないかと思う。

(3) 保田の朝鮮体験 (1932年7月、慶州を中心に滞在)

保田は、1932年7月、まさに『コギト』を出した頃に、夏休みを使って朝鮮に滞在し、慶州に行っている。その前の1919年に和辻の『古寺巡礼』という、奈良を一大観光地兼有名にした本が出たが、保田は和辻が嫌いだったので別のことをやろうとしたのである。

また、この当時、伊波普猷という沖縄から東大に入った2人目(1人目は謝花昇)の人が『古琉球』(岩波文庫)という作品を書いている。伊波は東大言語学科でグリム言語学を学んでいたが、グリム言語学を含めた当時のドイツの言語学や哲学はギリシャを文化の祖としていた。保田が卒論に選んだ「ヘルダーリン」もギリシャである。それからもう一人、保田は一切読んでもないし、交流もないが、ハイデガーもそうである。そういうなかで、伊波は日本のギリシャを琉球に置いたのである。

そういうところから保田が考えたのは、“外地の奈良”としての慶州だった。それで彼は慶州に行ったのである。そして、じつに戦略的に動いて慶州の仏国寺へ行き、そこで仁王像を見て、次のように記している。

この表情には意識の深さがあつて、単に感傷の奇古や原始の素樸さでない古典的なものがある。流派としての古典的といふものではなく、存在として古典的である。既に形態の完成とか均斉といふ形式的規範に於ていふ古典性でなく、つねに今日の意識に新しいものとしての古典性がある。

(「石仏寺と綏遠」『英雄と詩人』所収、全集三巻)

つまり、彼は「古典」と「現代」を仏国寺に行って知るのである。「今日の意識に新しいもの」＝「古典性」、すなわち「古典＝現代の意識」というものを、保田は“外地の奈良”で発見する。「古典」は今日の意識だからこそ読むべきであり、同時に現状を批判するものとなる。これは私の古典論だが、恐らく保田もそう思っていたであろう。さらに推測を重ねると、かかる古典観が核心に純粹性が置かれる国学のそれに近い。彼は国文学を一度も学んでいないし、近代国文学は学ぶ気もなかった。彼が好きだったのは国学であり、保田にとって古典とは国学的概念であった。



保田與重郎全集 第三卷
「英雄と詩人/エルテルは
何故死んだか」(講談社)

「国学」の間に「文」を入れると「国文学」になるが、国文学が生まれたのは 1890 年、明治 23 年である。それに関しても私は論文を書いているが、「国学」は戦闘的で廃仏毀釈まで引き起こしており、非常にイデオロギッシュである。本居宣長は一見人が良さそうだが、いかに中国や足利尊氏が酷かったかを書いている。そういう戦闘性、イデオロギーがある。

ところが、「国文学」は毒にも薬にもならない。こういって今は厳しい情勢から叱られるかもしれないが、少し前までたくさんあった女子大には必ず国文科があった。英文科もあった。その後、家政科ができた。奈良女子大も文学部、理学部、家政となっていて、旧制高校に家政を付け加えると女子大になるわけである。それで、「国文学」や「英文学」は基本的に役に立たないが、お嬢様にとってはちょうど良い学問として認定されていた。私は昔 20 年ほど女子大に勤務していた身として、そう感じている。

そのような人畜無害な「国文学」ではなくて、「今日の意識」である変革の主体になるのが、保田にとっての「古典」なのである。

(4) イロニーをめぐって

保田の大好きな言葉に「イロニー」がある。イロニーに関しては、アイザア・バーリンが重要となるが、もう一つ、カール・シュミットの『政治的ロマン主義』も重要である。特にみすず書房版の第 2 版の冒頭の序文で、カール・シュミットは「神様の位置に人間が座った悲惨さは、ニーチェやバイロンを見ればわかる」として、ロマン主義がいかに人間を不幸に追い込むかということを行っている。

そのカール・シュミットと同じことをしながら、互いに一切引かないのがアイザア・バーリンという巨人である。意識しながら引かないのだと思うが、このなかで彼はイロニーの定義について、「この観念は、あなた方は職業に従事している誠実な市民を見る時、正しく構成された詩—規則に従って構成された詩—を見る時、市民たちの生命と財産を保護する平和的な制度を見る時にはいつも、それを笑ってやれ、ばかにしてやれ、反語的であれ、吹き飛ばしてやれ、反対のことをまた正しいと指摘してやりたまえ、ということである。」と言

っている。簡単に言うと、屈折しているとしか言いようがない。

一方で、保田がイロニーを本格的に論じたのが「ルツインデの反抗と僕の中の群衆」である。ドイツのロマン主義文学である『ルツインデ』を大阪高等学校の友人に訳させて、それを論じるという離れ業を保田はやっている。

保田の文章は悪美文と呼ばれるが、私は美文とは思わない。戦前の一時期は本当に悪文で、一読して意味が分からないし、何が言いたいのかわからない。

超人の姿は、群衆に比べて彼ら自身の奈落の姿であつた。超人は群衆の奈落に他ならない。

(「ルツインデの反抗」『コギト』20号(「独逸浪漫派特輯」))

それで、私なりに解釈すると、恐らく保田が言いたいのは、孤独な自己が「優越感を歌う」ためには、「ありのままに」「裸体」であることが絶対不可欠だということだろう。そうでないと超人ではないのである。そこから、保田がヘルダーリン(精神病院の塔のなかで亡くなったドイツロマン派の巨人で、ハイデガーがヘルダーリンの本を何冊も書いている)を最高の詩人として捉えていたことが思い出される。「ありのまま」「裸体」といった純粹性、保田の言葉で言えば、「清らか」さをもつ超人だけが優越感を歌える存在なのである。純粹である故に自己を超越させ、それ故に群衆に復讐される。

こういう構図として、保田はヘルダーリンや『ルツインデ』を描く(ただし、『ルツインデ』はバーリンに四流ポルノ小説と言われた)。そうすると、このアイロニカルな存在が保田の「理想像」となるので、日本はイロニーとしての日本でなければならないし、英雄は英雄だからこそつまらない敵に殺される。こういうラインになって、ここから「偉大な敗北」という構想が出てくる。

「今希望と呼んでゐるものがまことに追想であつた」このシュレーゲルの言葉がイロニーをよく示しており、そこには皮肉を超えたものがある。それに対して保田は、以下のよう

イロニーのもつたましい内面性、迫烈した精神を知るもののみが再びシュレーゲルの歌を間近く抱いてゆくであらう (同上)

保田は「イロニーのもつたましい内面性、迫烈した精神」を『文学の立場』の「文明開化の論理の終焉について」で「没落への情熱」と言っているので、彼が戦争を支持したのも「没落への情熱」があつたからかもしれない。政治的な判断ができる人ではないからこそ、そう思える。そして、この精神を知るもののみが「シュレーゲルの歌を間近く抱いてゆくであらう」と言い、「いたましい内面性」以上に「迫烈した精神」こそ、英雄論、古典論へと進んでいく導因になると言っている。純粹性とイロニーは狂気や破滅を予想させつつ合体あるいは野合するということを、保田は敗戦まで書き続けていくわけである。

(5) 偉大な敗北の起源と系譜

ここで、「偉大な敗北」の起源と系譜について述べたい。

グンドルフ(1881年～1931年)という、今や忘れられたユダヤ人の批評家がいる。彼は1921年に『詩人と英雄』という本を書いており、保田の2番目の本の『英雄と詩人』はこれを逆さまにしたものである。

『詩人と英雄』のなかでグンドルフは、ナポレオンについて「ナポレオンは全く近代の天才ではなく、再び古代的な仕方での宇宙的人間であり、彼にとつてかの分離はアレキサンダーやシーザーにとつてと同じく不可能であった」と言っており、宇宙的な人間は分割できない、一つであると書いている。

それに対して、保田はナポレオンについて、活躍していることは書かず、『英雄と詩人』に所収の「セント・ヘレナ」(1935年)のなかで、ナポレオンがセント・ヘレナ島で悲惨な人生を送ったことを書いている。この「セント・ヘレナ」を、保田の弟子で『柳生武芸帳』を書いた五味康祐は、ベートーヴェン交響曲第3番第2楽章「葬送行進曲」だと言っている。そこまでかという気がしないではないが、このなかで保田は以下のように述べている。

僕はかつてヘルデルリンをのべて、この近代最初のギリシヤ人に、悲しい運命の側面をより近くみるとかいた。戦ふものは悲劇である。今日の戦ひに於て、文学者はそれを無償の行為と思ひ定め、英雄の精神を左右するえたいのしれぬもの——デーモンは、つねに美しい徒労にまで彼を駆る。戦ひは悲劇であり、勝つことも悲劇である。しかもこの悲しい運命に偉大な人は力強く戦つた彼らを見る。ヘルデルリンの教へたものは、まさに悲劇といふ勝利であつた。世俗にいへば彼らの光栄の日のセント・ヘレナである。

(「セント・ヘレナ」1935、『英雄と詩人』所収)

ナポレオンにとっては全く光栄の日ではなく、ワーテルローで負けて、追い出され、エルバ島ならすぐに戻って来るからと、アフリカの近くのセント・ヘレナ島に流されたのである。これが「偉大な敗北」という最初の用例である。

そして、彼はこのように言う。

セント・ヘレナは現在の精神の奈落である。(—中略—) 本当の敵と戦ふまへに、低い戦ひをせねばならなかつた。しかし英雄もまた、真の彼の敵と最後を戦ふまへに、彼の敵に備ひせぬものに破れて、その首を検された。

(同上)

つまり、これは現代の映画等に見る英雄対英雄の戦いではない。格好良い英雄がつまらない者に負けるのである。『太平記』のなかに宇治川の先陣争いのパロディがあるが、『平家物語』では宇治川を馬2頭で競争する話が、『太平記』では2人とも川にはまって死んでしま

うという話になっている。そちら側である。

(6) 日本武尊・木曾義仲

次に、日本武尊・木曾義仲について述べたい。

保田は、日本武尊についても以下のように書いている。

それであつて凜質としての美しい徒労にすぎない永久にあこがれ、いつもなし終へないものを見てはそれにせめられてみた。
(「戴冠詩人の御一人者」1936)

日本武尊も神を馬鹿にしてあえなく死に、白鳥になってしまうのである。

木曾義仲「木曾冠者」については、保田は木曾冠者が大好きで、わざわざ自分の墓を木曾義仲の墓の近くに建てたくらいであり、「この新しい力の健康さとして現れたものは顔敗を知らない璞である」(「木曾冠者」1937)と言っている。一般的に、木曾義仲は無知で、獰猛で、方言しか話せない野蛮人だと捉えられ、木曾義仲が死の間際に今井を顧みて「日来は何とも思はぬ薄金が、などやらん重く覚る也」(「源平盛衰記」と言った台詞は、木曾義仲が弱気になったと解釈される。そしてその後、今井四郎兼平が「あなたは気が弱くなっていない」と励ます。

しかし、これを保田は、以下のように捉えている。

これ程美しい丈夫の歌の一句を敍した戦陣の將軍は他にあつただらうか。実に美しい、限りなく悲しい歌の一きれである。
(「木曾冠者」1937)

ここまで説明して、保田のアイロニーと英雄論と「偉大な敗北」が一体となっていくことをお分かりいただけたと思う。そして「自分のいる状況の把握など一切考えていないのが義仲という蛮民なのである。かかる人物が無邪気に滅ぼされる」ということを「美しい」と言っている。ここでようやく、保田のアイロニーなどが理解されると思う。

III ゲーテと連動する後鳥羽院

(1) 「木曾冠者」に描かれた後鳥羽院

そこで、ゲーテ論に移りたいが、その前にゲーテと連動する後鳥羽院について述べたい。

保田は「木曾冠者」のなかで、後鳥羽院について以下のように言っている。

日本の古典時代の精神と発想とその系譜を解明する最も重要な鍵は後鳥羽院である。そこに日本の文芸の過去の意志はすべて集り、それより以後に発する流れの源のすべ

てを蔵するのである。

(同上)

そして、源の先に何があるかということ、それが芭蕉である。後鳥羽院から芭蕉に至るのが、保田の中世文学史である。

(2) 保田與重郎のゲーテ論

ゲーテに関しては、1939年に『エルテルは何故死んだか』を出した後、戦後になって2回ゲーテ論を書いている。「エルテルの死以後」は保田の死後に原稿が発見され、全集に入れられた。「エルテルは何故死んだか解題」は1951年2月に書かれている。

さてこれを執筆した当時の私は、近代批判から始つて、ゲエテがエルテルを殺したことに、同情したのである。(一中略一)ゲエテは、近代の価値を拒否し拒絶してゐる事実を教へた。私はよみとつた。ゲエテはたゞ直観で殺したのである。それが美しいと判断したのである。(「エルテルは何故死んだか解題」)

この「解題」の文章を読むと、木曾義仲の死に方と発想が似ているように思う。

私はこの数年間の隠遁時代にも(一中略一)この文章を執筆したときに考へた以上に、彼が「近代」の宿命を暗示し、これに代る原理を「東洋」に求めた事実を知つて、故人に対する尊敬をさらに深くした。(同上)

「隠遁時代」とは公職追放時代のことであり、「故人」はゲーテだと思ふ。

簡単に言うと、保田はここでゲーテを知つて、もう吹っ切れたように思う。近代というのは徹底的に批判して然るべきだと考え、その基準としてゲーテを置いている。

① ゲーテによる近代批判

「エルテルは何故死んだか」のなかで、保田は以下のように書いている。

ゲエテは偶発の主観的なものを、妥当する客観的意味あるものとして了つた。しかもかういふ事実の結果を与へつゝ、小説家はその結果の生活的倫理的影響については、何の解答も裁断もまして自衛の原理も与へなかつたのである。(「エルテルは何故死んだか」)

そして、ゲーテが批判した近代とは何かというところで、「近代とは因果律が觀念内を蹂躪した意味である」と言っている。今で言う、計画やAIなどで、すべて因果律で出来ていて、それが近代であり、ゲーテに言わせると「中世の迷信以上」である。

つまり、(因果を書くと近代になるので) ゲーテとは、因果を書かない、説明しない反＝非「近代」的な作家だということである。

すべてゲーテについて語られてみたことを云ふまへに、彼が「エルテル」といふ作品によつて作りあげた「近代」を考へ、ヨーロッパの近代文学の読み方を検討したいのである。

(「エルテルは何故死んだか」)

これが、この本を書きたい理由である。

近代一ヨーロッパの二人の父は、結局自己自身であつた近代を否定し、エピゴーネンを封鎖し、その否定によつて、真実を生まれさせようとした。

(「エルテルは何故死んだか解題」)

こうしてゲーテをギリシャ的な人間として捉えており、ここがまた古典とつながる。そして

彼はエルテルのやうに新ヨーロッパの諸価値に熱狂しなかつた。だからその矛盾にも無関心であり得たのだ。

(「エルテルは何故死んだか」)

と言ひ、わざわざ日本の古典論を書いて、ゲーテ論を展開している。

そして保田も、ゲーテのなかに深刻な裂け目を見出していく。むろん、裂け目も作り、裂け目の向こう側で苦しむウェルテルをあつけなく始末したのもゲーテだと見ていくのである。かかる捉え方は、ゲーテ研究などでは歯牙にも懸けられなかつただろうが、そんなことは保田の知ったことではない。保田はこう読み、自らをゲーテと一体化し、近代を抹殺しようとするのである。

② ゲーテ＝ハーフィズ、保田＝後鳥羽院

そして、彼は、ゲーテが『西東詩集』で高く評価しているイランの詩人ハーフィズを出すように、自らは後鳥羽院を出していく。そうすると、今度は保田本人が「文明開化の論理」に侵された日本を救っていかねばならない番になるだろう。そうしたとき、ゲーテにとってのハーフィズは、保田にとっての後鳥羽院として獲得される。このようにして、後鳥羽院論を展開していく。

(3) 保田與重郎の後鳥羽院論

① 後鳥羽院の意義

前述のように、日本の文学の伝統は後鳥羽院に集まり、また後鳥羽院から流れていく。その末期の劃期者、綜合者としての意味はわかるが、後鳥羽院が最も偉大なのは何故か。

後鳥羽院は「日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ」という人がいるくらい、何でも上手かった。恐らく歌は定家以上に上手かっただろうし、馬術も上手い。宮中に入った泥棒を退治しているので喧嘩も強い。しかし、そのように何でもできる人間は最大の失敗をすると大山喬平が言っていたように、後鳥羽院は承久の乱に敗れ、島に19年間流された。

保田に言わせると、「おどろが下も踏み分けて 道ある世ぞと 人に知らせん」のが後鳥羽院で、おどろが下の道を教えようとして、彼は負ける戦いを行った。

永遠の信念の発露が失敗の因であつた。厳粛な信念に対する決意は、既定の失敗の見透しの上に立つてさへなさねばならなかつた。（「本文芸の伝統を愛しむ」『後鳥羽院』所収）

このように、まさに「偉大な敗北」を地で行ったのである。

② 後鳥羽院と文芸の王国

つまり、後鳥羽院は「偉大な敗北」を実現し、しかも文芸をまとめ、そこから起源となる。そして、これが日本文芸の中核にあるはずだとすると、日本武尊、木曾義仲から後鳥羽院に至り、最後にその後鳥羽院の志を継いだのが芭蕉である。

後鳥羽院が後世の詩人に教へられたことは、その大様の文芸王国の精神であり、一人でそれを支へる、詩人の決意である。（「物語と歌」『後鳥羽院』所収）

「大様」は宮中の輝かしさ、孤島の寂しさを、それを合わせた文芸の王国を意味する。ちなみに、現実の後鳥羽院は、島に送られるまで和歌への興味を失っていたが、沖ノ島に行って、また和歌が復活する。一番代表的な仕事が「時代不同歌合」で、これは時代が違う人を合わせて歌合をするものである。それから『新古今和歌集 隠岐本』を作っている。したがって、実際には微妙な違いはあるが、保田の表した後鳥羽院は間違いではない。

IV 保田の戦後、絶対平和論へ

(1) 戦後、浴びせられた批判

そこで戦後に話を進めると、戦後の保田は、前述のように1946年、37歳で復員して農業に従事した。しかし、彼は農業に向いておらず、田圃を貸している農家の人がこっそり田圃を増やしたり、畦道を削ったりしている。

そうしたなかで、1948年に公職追放になる。戦後の保田は批判を受け続けることになるが、その典型が杉浦明平である。この人は保田の3歳下で、ほぼ同時代人であり、「思想探偵として犬のやうに鋭敏で他人の本のなかの赤い臭をかいはこれを参謀本部第何課に報

告する仕事をしてきた」（「保田與重郎」1946年『文学時標』第五号、同『暗い夜の記念に』1997年）と自身の本のなかにも書いている。

ところが、これは妄言であり、根拠はない。仮にもしこのようなことをしていたら、懲罰的徴兵を36歳で受けることは多分なかったはずである。しかし、文壇の無視、黙殺、白眼視は続き、数年前に亡くなった文化勲章受章者の大岡信など、保田を原発事故の後の放射能のように論じているものもあった。

（2）絶対平和論への道程

そこで、彼は戦後の絶対平和論に向かう。昭和19年に一度断筆し、公表を意図せずに『鳥見のひかり』や『天杖記』などを書いたが、そのなかで彼は自分が書いてきたことについて、

自分の思想は、神州と皇民の原理に立脚し、民族の不滅の信を描くために、永遠の祭祀に仕へ奉らうとする微志の表現に他ならない。（『天杖記』あとがき）

と言っている。「神州」とは日本のことであり、永遠の神に対してお仕えしていたというのである。これについて私は、「この時、保田には文明開化の論理に基づく思想運動も、さらに近代的な意味における勝利も敗北もなくなっていた。あるのは、『民の生活は祭りの生活』という『祭政一致』観念に支えられ、日々『祭祀に仕へ』る行為だけである。敗戦必至の戦局の折に、何と呑気な、あるいは、不謹慎ななどと言われそうだが、筆を折る直前、保田はとっくに近代を超越していたのである。かかる態度こそ、イロニイを超えた『偉大な敗北』だったのではあるまいか」と『昭和史講義』のなかで書いている。

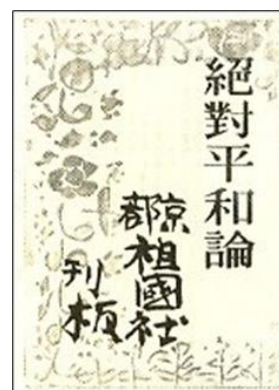
（3）「絶対平和論」の提唱

そうしたなかで、保田は「絶対平和論」を無署名で書いている。

進んで近代の文明を、東洋の人倫道義の見地から、その根柢に於て批判し、その終焉を論ずる。（－中略－）アジアの道義的生活の恢弘によるのみである。日本と亜細亜の、伝統の原則生活を除外すれば、平和の生活的基盤は、いづこにも存在しないのである。

（「絶対平和論」刊行趣旨（無署名））

これについて保田は「答 一言についで申しますと、その生活から戦争の実体も心もちも生れない、平和しかないといふ生活」と言っている。具体的にいうと、近代技術、近代産業をすべて否定して全員が農民になるということだが、ただし、農民も農機具等の道



保田與重郎全集 第二十五卷「絶対平和論/明治維新とアジアの革命」（講談社）

具を使っているのは事実である。そして「一つは近代とその生活の不正を知り近代生活を羨望せぬこと」と言うが、保田もさすがに近代生活をしているし、近代生活をせずに暮らすことはできない。

さらに「近代文明以上に高次な精神と道徳の文明の理想を自覚すること」と述べており、これに対して、具体的に「国土計画の思想は何か」と問われると、「完全耕作」「全員農民」と答えているが、保田本人は2年で農民に飽きてしまうのである。

次に「それは近代文化を否定することか」という問いには、「さうとられてもかまひません。いや、無関心なのです」と答えている。無関心であればよいという形で、彼は近代、及び近代産業、近代政治システム、経済システムが、結果的に戦争を起こすということを分かっていたのだと思う。

(4) 保田與重郎と戦争

最後に、保田與重郎と戦争について、対談から彼の肉声を紹介したい。

わたしは、今になって反省していることは、戦争に協力できなかったことです。

(「日本の心 中河與一／保田與重郎」1968年『保田與重郎全集』別巻四)

この発言は1968年のことで、すでに64年に復帰した後であるが、彼は協力が足りなかったと言っているし、協力したつもりもなかった。

そして、もう一つ別のところで、2年後に以下のように言っている。

戦争が来たということで、何の他意もないです。軍部がやっていることに対する判断はあった。これは「皇軍」ではないという批判です。(－中略－) 軍部から嫌われたのはちょっと心外でした。(－中略－) 戦争にも協力できず、国運にも奉公できなかった
(『保田與重郎全集』別巻四、「転形期と日本浪漫派」、白川正芳との対話、初出『第三文明』1970年)

これは自分が批判されているときではなく、ある種の文壇に復帰した後の発言なので、保田與重郎の本音だと見てよい。彼はその意味で戦前・戦後も一切変わらなかったのである。近代批判、偉大な敗北、そして近代をある意味で超越して絶対平和論という形で展開したが、やはり戦争には協力できなかったと言ったのだらうと思う。

質疑応答

- Q1 ゲーテの近代批判と保田の主張はどのような関係になるのか
- Q2 保田は農民文学をどのように評価していたのか
- Q3 生家の宗教は保田に影響していたのか
- Q4 現代の日本における「偉大な敗北」の意義とは何か
- Q5 保田は、近代批判の最右翼である永井荷風に言及したのか
- Q6 時代は直観型への節目なのか、これをどう考えるか
- Q7 『コギト』に注目しないのは近代日本文学研究の欠点ではないか
- Q8 『保田與重郎全集』の編纂に関わったのはどういう人たちなのか

Q1 ゲーテの近代批判と保田の主張はどのような関係になるのか

一般的に、ゲーテの近代批判は、1970年から始まる『色彩論』研究とニュートン批判に始まり、ロマン主義批判を経て、最晩年の遍歴時代と『ファウスト』第二部で頂点を迎える。ゲーテは一方でニュートンや産業革命のような近代の客観主義を批判し、他方でロマン派の主観主義を批判して、『若きウェルテルの悩み』は悲観主義に近い。保田はその点に注目して『ウェルテル〜』にゲーテの近代批判の端緒があると言ったのか。保田は『ウェルテル〜』やドイツのロマン派のような主観主義に近かったのではないか。どのような関係になるのか。

(前田)

私はドイツ文学については詳しくないが、ゲーテに関してはご指摘のとおりだと思う。保田がゲーテ研究の系譜やゲーテの様々な作品を全部読んでいるとは考え難いので、結局、思い込みでそのように考えたのだと思う。

彼も個人主義的なところがあるかもしれないが、最終的に保田のロマン主義＝「日本浪漫派」は、近代日本を葬りたいという、どこか個人主義を超えたようなところがあると思う。

私は保田を通してゲーテの本を少し読んだが、すべては彼の解釈であり、恐らく、膨大なゲーテの研究者のなかでは全く相手にされなかったと思う。しかし、戦後に至るまで執拗にゲーテにこだわっていたのは、恐らく彼は、彼が読むところのゲーテの近代批判で大変な力を得たからではないか。同時に、ゲーテの『西東詩集』におけるハーフィズ、つまり東洋型の生き方が「絶対平和論」などの端緒になっているのではないかと思う。これはすべて保田の勝手な読み取りであり、ゲーテ研究のなかでは「何を変なことを言っているのか」で終わってしまうと思うが、保田はそう読み取ったのだと思う。

保田という人物は、「私は万葉の里で生まれた」と言っているが、実際に彼が『万葉集』を読んだのも、日本の古典を読んだのも旧制高校に入ってからである。しかも渡辺和靖氏が暴いているように、旧制高校に入って、岩波文庫の日本古典編が出始めてから勉強している

のである。一方で、彼は『コギト』において、服部正己をはじめとしたドイツ語の達人に、グンドルフなどいろいろなものを読ませ、彼らの訳を使って自分の論を書くことを何とも思っていない。そういうことから、私は保田という人を「成長する文人」と本に書いたことがある。つまり、勉強しながら、自分の言いたいことの端緒になるものはないかと常に探していて、使えるとなれば何でも貪欲に使ってしまう、これが保田型だと思う。

したがって、ゲーテも恐らく旧制高校の頃に少し読んでいて、ふと思いついて、もう一度読んでみたときに「僕が思っていることがそのまま書いてあるではないか」と読み取って、近代批判に使ったと思われる。それが結果的に、ゲーテの近代批判とどこかで重なったのかもしれないが、保田はそういう研究状況を何も知らないと思うので、彼なりの解釈だったと考えられる。

ドイツロマン主義は、私も『ルツインデ』を翻訳で読んだが、記憶にあまり残っていないくらい面白くなかった。亡くなった川村二郎先生は昔から保田を高く評価していたが、その川村先生が、保田のドイツロマン主義理解を、当時ではかなり深いところまで至っているとされていたので、基本的に直感派だが、センスは良かったのではないかという気はする。

Q2 保田は農民文学をどのように評価していたのか

保田の問題意識として、日本浪漫派の誕生と日本プロレタリア作家同盟の解散が同年だったことから、その両者を対比しているが、農民文学についてはどのように評価していたのか。

(前田)

彼は実際、戦後に少し農業に取り組んでいる。また、彼は「哀愁」という言葉を意外と出して、『後鳥羽院』や木曾義仲のところにも出ているが、彼自身、旧制高校時代にマルクス主義にかぶれたことは確かである。しかし、農民文学には、ほとんど関心がなかったのではないか。マルクス主義に関しては、『文学の立場』に入っている「文明開化の論理の終焉について」において、文明開化の論理の最終形態がマルクス主義であろう、そのひっくり返った形が日本主義であろうと両方を批判している。

つまり、農民文学に関しては、戦前は何も言っていないと思う。保田與重郎生誕 100 年に当たる 2010 年に、新学社主催で「保田與重郎を偲ぶ夕べ」が行われ、私もヤクルトホールに参加したが、そこで保田與重郎の世界を映像化したものが上映された。これは元気だった頃の菅原文太が出演し、農本主義者のような保田與重郎を描いていたが、エコロジストの保田與重郎を描いていたわけである。確かに、戦前の終わり頃から「祭政一致」の生活という形でエコロジカルに似たようなことを言っていたが、彼自身は農民を 2 年で挫折する程度であり、本当の意味で「祭政一致」型生活をしていただろうかは疑わしい。例えば、桜井にその後もずっと暮らしていたわけではなく、昭和 33 年から京都に移っている。伊東静雄が「帰りたい」と言いながら諫早に帰らなかったのと同じように、保田も結果的に都市の世界の人ではないかと思われる。

農民文学に関しては、小林秀雄に対抗して「故郷を失った文学」ではないと別の形の論を

書いているが、あまり研究していないのではないかと思う。もう少し調べたら出てくるかもしれないが、今のところはこの程度である。

Q3 生家の宗教は保田に影響していたのか

保田は国家神道の時代も付和雷同しなかった。そこには古典に対する造詣の深さもあるが、同時に、彼の生家の宗教である融通念仏宗の理念や感性が影響していたのではないか。

(前田)

影響はあったかもしれない。彼自身、故郷を語る時に「万葉の里」とか「実は南朝の地域だった」などと言っているが、彼は自己の人生をかなり神話化する癖もあった。しかし、古典の造詣は、特に『万葉集』に関しては半端ではないと思う。ただ、やはり融通念仏宗なり、念仏型の世界とどこかで絡んでいたかもしれない。

彼は仲間を集めていろいろやるのは好きでも、それを超えるような公的存在や公的機関、大所高所的な立場はあまり好きではないところがある。したがって、昭和17年の「近代の超克」にも「出る」と言いながら出ていないし、「もういいや」というようなところがあったかもしれない。

確かに、融通念仏宗のことは全く気付かなかった点なので、これを機に彼の宗教生活について考えてみようかと思う。ただ、彼自身は天理教の真柱と仲が良かったので、意外に誰とでも仲良くするタイプではあった。

Q4 現代の日本における「偉大な敗北」の意義とは何か

戦中、戦後と態度を一変させた日本人が多いなかで、保田はぶれなかったということだが、その軸を確立するうえで「偉大な敗北」があったのではないか。人口減少、超高齢化等の状況が目の前に広がっている日本において、「偉大な敗北」の意義はどうなのか。

(前田)

私もそれを少し考えたことがあるが、例えば、佐伯啓思先生が言われている「反成長」など、そういうものが意外にあるのではないかと思う。保田の場合は、「偉大な敗北」が日本文学のぶれない軸になっているが、では、戦後、それで何かを見出すかということ、なかなか難しいのではないか。

私と同姓の前田氏が、暮らしにおいて保田をエコロジストに描こうとしているが、私は、やはり彼はかなり田舎のモダニストではないかと思っている。しかも、旧制高校上りの典型である背伸び青年で、いろいろと模索しながら、ふと「英雄というのはつまらない敵にやられるから、英雄なのだ」と考え、ドイツロマン主義体験やさまざまな形から「これは意外にいけるかもしれない」と思ったのではないか。小林秀雄は「故郷を失った文学」を書いたが、それを意識して書いた保田の評論が「土地を失った文学」である。

そういうものがあったが、『文学の立場』に書かれた「文明開化の論理の終焉について」でいえば、「文明開化の論理」を打ち壊したものは満州事変と日中戦争であり、それによっ

て世界が変わると論じている。当時は負けることを知らないで、彼は、満州事変も日中戦争も文明開化の論理＝植民地文化だと言い、そして、植民地文化の典型が大正文化であると言うが、具体的には恐らく和辻を指していると思われる。和辻から古典認識が変わるからだ。

私の専門に近い話になるが、明治時代に博識で知られた依田學海という人物がいた。依田學海は幕末から明治を生きた人で、日記が知られているが、『源氏物語』を江戸時代の注釈書である『湖月抄』で読んでいる。『湖月抄』は北村季吟著で、中世の注釈書の良い処取りをしているので、そういう注釈書を使って古典を読んでいたという文化は、ある種国学的である。また、本居宣長はそれを自分で作っている。

ところが、和辻になると、今度は評論的に読む。『古寺巡礼』も、嘘か本当か知らないが、法隆寺のエンタシスなどを古代ギリシャと重ね合わせたりしている。保田に言わせると、それはまさに「文明開化の論理」である。ヨーロッパの近代を基準にする日本、彼はこの段階で「日本の近代文化は植民地文化ではないか」と言っている。私は日本の戦後はある意味で植民地ではないかと思うことがあるが、それよりもかなり前に同じことを言っていたわけである。そうすると、近代国文学も植民地文化、文明開化の論理なので、前に行って、現状を壊すものとしてやらなければならない。

そのような意味で古典があったと思うが、保田の古典評論は良いものが多く、川村二郎先生がまとめられた『保田與重郎文芸論集』が講談社文芸文庫から出ている。私が彼の古典評論でおもしろいと思うのが『後鳥羽院』という分厚い本だが、そのなかで後鳥羽院について書いているのはわずかで、他は芭蕉などいろいろと書かれている。たくさん書いてまとめているが、私は『木曾冠者』や『芭蕉』などは悪くないと思う。

また、保田の怖さは、古典に対する造詣の深さと同時に、歌が上手いということもある。「さざん花の花ちる庭のわりなしや よべのあらしに冬来りけり」と「国歌大観」に載ってもよいくらいの歌を詠んでいるが、短歌ではなく、和歌である。私は日本最後の家人は保田與重郎と昭和天皇だと思っている。今の天皇陛下の歌は短歌だが、昭和天皇の歌は和歌であった。明治天皇も和歌だったので、この違いは教える人の問題だと思う。

そのように、保田與重郎は怖いほど歌が上手く、古典的な勉強もしているが、ただ、私が「身余堂」に行って書架を見た限りでは、それほど古典の本はなかった。片づけられたのだと思う。保田は学者ではないので、たくさん本を並べて、カードを作りながら本を書いたことは一度もないと思う。その点で、まだ小林秀雄は、傍らに『本居宣長全集』を置いて『本居宣長』を懸命に書いたのではないかと思うが、それを最後まで褒めていたのが保田である。そのお礼に、小林は保田の密葬に駆け付けている。8歳年下の保田に対して「やはり、俺と保田だ」と思っていたのかもしれない。

そういうところだが、今回は融通念仏宗という宿題を頂いたので、もう一度、保田の家の宗教を調べなければならない。古典論も私の著書は『後鳥羽院』で終わっているが、それは保田が30歳のときまでで終わっているということである。その後、保田は戦前に『萬葉集の精神』を出したが、彼は大伴家持が『万葉集』を全部作ったと考えて書いている。そして、

死後出されたのが『わが萬葉集』で、文春の学芸文庫に入っている。

保田與重郎を読むのが面倒なのはテキストがなかなか手に入らないためだが、新学社版の文庫にはほぼ入っている。ただ、新学社版も普通の書店では売っていない。他の文庫では、文春文庫に『わが萬葉集』、講談社学術文庫に『日本の橋』と『芭蕉』が入っているのだから、その辺りで読むしかない。もう少しいろいろな出版社から出してほしいと思っているが、日本の古本屋で買うとかなり安く買える。

Q5 保田は、近代批判の最右翼である永井荷風に言及したのか

日本文学史における近代批判の最右翼は永井荷風だったと思うが、保田は永井荷風に言及していないように見受けられる。それはなぜだと思われるか。

(前田)

じつは戦後に言及していて、永井荷風が『断腸亭日乗』で敗戦の日に「ワインを飲んで歓迎した」と書いているのに対し、怒りを込めて書いている。しかし、保田與重郎が長く意識していた日本の作家は朔太郎と佐藤春夫であり、永井荷風についてはほとんど論じていない。これは「どこか私とは違う」と思っていたからではないか。永井荷風も『日和下駄』や『断腸亭日乗』に見られるように、かなり皮肉屋だが、保田とは皮肉のあり方が違う。

近代批判はご指摘のとおりで、永井荷風はフランスから帰国してしばらくして江戸に逃げたとか、江戸情緒を描いたとか言われるが、彼自身は今のアークヒルズに住んで、ペンキで塗った建物を「偏奇館」と名付けていた。『墨東綺譚』は映画にもなったが、彼にとって下町は異空間である。

永井は文人で、政治家で、漢詩人で、経済人の息子だったので、誰かが「永井荷風と芥川龍之介は近代の正反対」と書いている。記憶に間違いがあるかもしれないが、芥川龍之介は、牛乳屋か袋物屋に生まれたか、あるいは、どちらかの養子になっている。しかし、あまりにも勉強ができたので、彼は府立三中から一高へ推薦で入っている。

ただ、私が調べたところでは、文学者には勉強のできない人が多い。志賀直哉は東大も卒業できていない。漢字も書けなかったという話である。そういう勉強のできない人たちを救うのが文人、作家である。例えば、辻邦生はいかにも秀才に見えるが、旧制松本高校を卒業するのに5年もかかっている。一番面白かったのは三島由紀夫で、彼はとてもまめな人で、自分の成績表を全部残していたので、東大の成績表と高等文官試験の順位が三島由紀夫記念館に展示されていた。東大では15科目中「優」が6つあったが、「優」が10以上なければ東大には残れない。それから、高等文官試験は後ろから数十番目の150位以下で「なぜ通ったのか」と近畿大学の佐藤氏に聞いたところ、「当時は省別に募集していたから、大蔵省でビリだったけれども採用された」という話だった。三島由紀夫の場合は学習院高等科をトップで出て東大に行ったが、大学時代から半プロ作家だったので勉強していない。

それで、永井荷風の話に戻ると、永井荷風は中学を出た後は全部だめだったが、慶応大学の教授になった。それとそっくりなのが朔太郎である。朔太郎も中学まで出た後は全部中退

である。作家とはそういうものであり、逆に言うと、芥川龍之介が異常である。その前なら有島武郎が秀才である。ちなみに漱石、鷗外は秀才だが、あの人たちは作家ではない。当時、プロの作家で東大を出た人は尾崎紅葉しかいなかった。

そういう意味では、永井荷風が江戸に逃げ、一高から東大に行った秀才の谷崎潤一郎が関西に逃げるという現状逃避のような行いと、保田の近代批判はやや違うと思う。谷崎は震災前の東京が好きで、関西に行った。私も大学は国文科というつまらない学科を出たので、大学に全く行く気がなかったが、入ったから仕方なく在籍していた。永井荷風は凄い作家だと思うが、大逆事件の後、現状が嫌になったなどと言って、『墨東綺譚』にせよ、何にせよ、やはり外部から見た風俗ではないかという感じがする。彼は空襲で家が焼けたために市川に避難したが、市川は文士村で、太宰治も住んでいた。あの人は、決して焼け残ったような妙なところには住まない。

したがって、永井荷風に関してはご指摘のとおりである。ただ、近代批判のあり方はたくさんあるし、逆に言うと、近代批判のなかで忘れられているのが柳田國男だと思う。彼は「常民」という言葉を作ったが、農商務官僚で官の最後が貴族院書記官長という、貴族院議長の次くらいの高級官僚である。それで、近代化したときに、当時は8割が農民だったので、どうしたらその人たちを守れるかと頑張っ、農民組合を作るように言うなどしている。彼は官僚だった20代の頃から早稲田大学などで講義をしていたが、日本の近代化路線にべったりと沿っていた。

これもじつはそれほどいなくて、私が明治の頃でもう一人研究しているのが井上毅である。彼は憲法を作り、今いろいろと問題になっている皇室典範を作り、それから教育勅語を作った。彼自身が朱子学者で、そこからフランス学者に転じ、フランスに留学して、少し寄ったプロシアで「日本はプロシア憲法以外を取り入れてはだめだ」と考えるようになった。女帝を否定したのも、イギリスの真似になってしまうからである。それで憲法を作るときも、最初は上皇も認めていたが、最終的に伊藤の説得を受け入れる。彼は亡くなる2週間前に「梧陰存稿(ごいんそんこう)」をまとめたが、そこで「私は漢籍と共に育ってきた」と言っている。14歳で『春秋左氏伝』を自在に読みこなしていたと言われ、恐ろしい学識だった。

その彼が最後に文部大臣を務めたときに漢文・古文廃止論を唱える。歌は下手だが詠んでいた。それが、正岡子規が「和歌・俳諧を変えない限り、西洋の詩人に負けてしまう」と言って、短歌・俳句革新運動を行ったのと軌を一にして、井上毅は「今の日本語や古典ではヨーロッパに負けてしまうので、無念の涙で古典を捨てる」と決断する。

その後に出てくるのが漱石や鷗外だが、漱石は慶応3年生まれなので北村透谷とは同世代である。煩いのは天保世代の井上や大隈、福澤たちで、彼らはまだ小さい頃に漢文塾がたくさんあったので両方できる。それが無くなるのが和辻世代の大正知識人である。したがって、荷風はその微妙な頃に勉強がダメで、アメリカに渡り、フランスに行って戻って来たという経緯があるので、偉大な人ではあるが、その辺りの時代を括って、反近代の系譜をもう少し追ってみたいと思っている。

逆に言うと、保田は明治 43 年に生まれて、3 歳のときに大正になるので、幼少期から大正の文化で育っている。大正期は、日清戦争、日露戦争に勝って、近代化が成った後だが、その大正期で一番大事なのが漢詩壇の崩壊である。明治は江戸時代よりも漢詩文が盛んで、森槐南などが出ているし、漱石も鴎外も漢詩集がある。ちなみに荷風も、館柳湾などの江戸時代の漢詩人に対してかなりの造詣がある。それに、巨大な幸田露伴という、東洋のことなら何でも知っているような恐ろしい人もいた。それが大正 6~7 年頃に、新聞から歌壇、俳壇を残して漢詩壇が消えることになる。つまり、西洋化が浸透して、それが大正デモクラシーと結びつくわけである。

それに対する反動は、一つがマルクス主義で、もう一つが保田のような形になる。ただおもしろいことに、昭和の最初の 3~4 年まではマルクス主義全盛だが、満州事変の後になると急に日本型に戻る。日本は今、戦後民主主義を謳歌しているようだが、もう 70 年経っているのに、またどうなるか分からない。

Q6 時代は直観型への節目なのか、これをどう考えるか

今 YouTube では、若い人たちが『古事記と言霊』を語り、都市脱出や農民回帰をするなどの動きがある。たくさん資料を基に本を書くのではなく、直感的に思ったことを思ったように発信するという、直感型が今は時代を動かしているのではないか。時代の節目がきているように思うが、それに関してどのように考えられているのか。

(前田)

確かに現状を見ると、行き詰っているところはあると思う。しかもコロナ禍である。ところが、私が大学の教員をしておもしろいと思ったのが、コロナ禍になって元気になった人たちがいることである。それは引き籠りの人たちで、じつは引き籠りの人たちにとって、コロナは神風であり、何人も引き籠りから復活した人がいる。

逆にいうと、今の世の中はマニュアルが出来過ぎていて、それに乗れない人がたくさんいるということである。私は日本文化学科にいるが、一時期「文学部などは潰れてしまえ」「無くなってしまえ」などいろいろと言われた。しかし、日本のことなら何でも研究できるので、行き場のない人にとっては一番良いところである。

そういうわけで、私も YouTube はときどき見るが、いつも不思議に思うのは、なぜこのように若い人で戦前の戦闘機などに異様に詳しい人がいるのかということである。私も軍オタだったので大体分かるが、あれがどれだけの影響力を持つかとなると不思議である。

はっきりしていることは、大学生に新聞・テレビはほとんど影響がなくなっているということである。彼らはそれらを見ないで YouTube を見ているのではないか。若い人に自民党支持者が多いと言われるが、今一番左の全共闘世代がいなくなったら、ほとんど左がいなくなるという現状になりつつある。そういう時代がなぜ起きたのか。例えば、これだけコロナでマスコミが煽ったり、いろいろと言ったりしても、繁華街にはたくさんの方がいる。自分勝手に生きると言ったら言い過ぎかもしれないが、段々とアメリカに近づいてきたのでは

ないかという気がする。

中国は統一と分裂を 3000 年繰り返しているだけなので、今度はいつ分裂するのかと思っているが、私が以前から構想し、いずれ『和漢と三国』という題で本を書こうとしている観点から言えば、日本にとっては昔から日本が上か、中国が上かという問題があった。これに関しては、長く中国が上で日本が下だったが、江戸時代は日本が上になった。明治になると欧米が上に来るが、それが日本主義などになって、また日本が上になる。それから、アメリカと戦争をして負ける。そして「ディズニーランド万歳」になるが、実際に子どもたちを見ると、ディズニーランドには行っても、ディズニーの昔のアニメなど見たことがない。逆にポケモンなどから影響を受けている。

私は 1954 年生まれだが、我々の高校時代の主流は欧米ロックだった。ビートルズもそうである。それで、クラシック、ジャズ、演歌という変人三集団があり、それにフォークソングが入るくらいである。ところが、今、欧米ロックなど若い人は誰も聴かないのではないか。ほとんど J-POP になってしまった。気がついたら日本化していたというのは、ある意味では確かだと思う。

ただ、保田型のイデオログは出ないと思う。福田和也が一時いいところまで迫ったが、結局なりそこねた。4 年前に自殺死された西部氏とは、保田を巡って一度議論をしたことがあり、「どのように死を捉えるかという思想が日本浪漫派だろう」と言われていたが、あの人もじつは直感派で意外に当たっていた。ただ、裏側に保田以上のニヒリズムがあって、なかなか大変な人だった。

そういうわけで、どうなるかは分からないが、日本も、和漢も、日米もひっくり返ったりするので、逆に言うと、どうでもよいのではないかと思う。私は韓国で講演したときに、韓国の一部の人が日本を非常に意識しているのに対し、日本にとって韓国は、東京の人にとっての地方のようなもので、別にどうでもよいと考えて、「いくら主張しても日本人には響かないので止められたらどうか」と言ったことがあり、一部から響感を買った。

Q7 『コギト』に注目しないのは近代日本文学研究の欠点ではないか

『コギト』は日本における重要な雑誌だと思う。こういうものに注目しないことが、近代日本文学研究の欠点ではないか。先生はどう思われるか。

(前田)

その通りである。保田研究においては、一番良い研究をするのが文芸評論家か日本思想史研究者であり、国文学者が報じないのはかなり問題である。『コギト』は臨川書店から復刻版が出ているので、読むことができる。なぜこれが昭和 19 年 9 月に廃刊になったかという、紙の配給がなくなったからである。

Q8 『保田與重郎全集』の編纂に関わったのはどういう人たちなのか

講談社で『保田與重郎全集』を編纂した吉村千穎(よしむらちかい)は、三島由紀夫の編集

者でもあったが、ご存じか。

(前田)

編集者は吉村先生で、実際に校訂をしたり、いろいろと調べたりしたのは谷崎昭男先生である。谷崎昭男先生は潤一郎の甥で、谷崎清二の息子であり、保田與重郎の最後の弟子である。国文学者というよりも半分は評論家のような方で、相模女子大学の理事長を務められた。その方が2年前に亡くなられ、吉村先生が追悼集を出されて、私のところまで送ってくださった。私も丁重な礼状を吉村先生に差し上げて、吉村先生の本を日本の古書店で購入し、「こういう偉大な人がいたのだ」「こういう人がいたから、『保田與重郎全集』が出された」と述べた。あの全集は校訂も完璧である。

この文庫の本文は『保田與重郎全集』である。ところが、面倒なことに、『日本の橋』もそうだが、保田は初稿、第二稿、第三稿とどんどん書き換えるので、永遠に校訂しているような感じになる。彼は書き換えることによって、よりレベルを上げていくような、そういう人である。

したがって、吉村先生は名前だけ知っているが、最近、素晴らしい贈り物を頂いた次第である。

発行日	2023年12月31日
講演著者	前田 雅之
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)